

研究タイトル カンボジアにおける熱帯畜産の確立に向けた課題発掘：在来雌ウシの繁殖成績の季節変化
研究者名（所属先） ・ Tep Bengthay (名古屋大学アジアサテライトキャンパス学院) ・ 森田康広 (名古屋大学アジアサテライトキャンパス学院・大学大学院生命農学研究科) ・ 上野山賀久 (名古屋大学大学院生命農学研究科) ・ Pheng Vutha (名古屋大学アジアサテライトキャンパス学院)

【目的】

人口増加と経済発展にともない、カンボジアでの畜産物の需要は高まっている。本研究は、熱帯気候下のカンボジアにおける動物生産の課題を明らかにする目的で、カンボジアの在来雌ウシの繁殖成績の季節変化について検討した。

【方法】

凍結精液を用いたウシの人工授精が行われているポーサット州において、2016年1月から2017年12月までに行われた331頭の雌ウシの人工授精成績を調査した。発情の確認と人工授精は、ポーサット州の畜産局の人工授精師が実施し、人工授精時に雌ウシのボディコンディションも合わせて記録した。ポーサット州の最高温度と降水量の記録を基に、11月から2月までを乾期、3月から6月を最暑期、7月から10月を雨期に分類し、人工授精の実施頭数、産仔率の季節変化を検討した。また、雌ウシの飼養状況の季節変化について農家を対象に聞き取り調査を行った。

【結果】

人工授精の実施頭数は、乾期に最も多く、雨期と比較して有意に高かった。産仔率は、乾期に人工授精を実施した雌ウシにおいて、最暑期、雨期と比較して有意に高かった。乾期に人工授精を実施した雌ウシのボディコンディションスコアは、最暑期、雨期と比較して有意に高かった。また、聞き取り調査の結果、稲作の終わった乾期において、水田に放牧された雌ウシは、餌となるイネ科やマメ科の植物を十分に得られているが、水田の野草が枯れてしまう最暑期、稲作が始まる雨期において、十分な餌が得られているとはいえない状況であった。

【結論】

最暑期と雨期におけるカンボジア在来雌ウシの繁殖成績の低下は、餌となる植物が少なく、ボディコンディションが低下することが原因と考えられた。このことから、カンボジアにおける動物生産の課題として、雌ウシの繁殖成績の向上のために、最暑期と雨期における飼養管理の改善による雌ウシのボディコンディションの向上が重要であることが示唆された。